



厳しい状況こそ絶好の好機 変わる住宅の価値と評価

千尋
Chihiro

パッケージを白と黒の二色に抑えた「ポテトチップス」や「かつぱえびせん」が、コンビニエンスストアなどに並び始めた。色鮮やかなパッケージが並ぶ中で白黒の袋はひとときが目立つ。もの珍しさについてい手が伸びてしまった方も多かるう。

白黒パッケージの原因は、緊迫する中東情勢に端を発する資源不足でパッケージの印刷に必要なインク（材料（ナフサ）が手に入りにくくなったこと。スナック菓子大手のカルビーが限定的に販売する白黒デザインには「石油原料節約パッケージ」と表記されている。材料費が上がった分だけ商品価格を上げたり、

値段は据え置く代わりに中身の量を減らしたりする企業が大半を占めるなか、カルビーは他社と異なるアプローチを取った。

二色にすると消費者が商品を見つけにくくなったり、安っぽい印象を与えたりする懸念がある。味や季節感などの表現が困難にもなるだろう。だがカルビーは外見の美しさを犠牲にしても中身を必ず届けるという道を選んだ。外装の色彩を極限までそぎ落とすことでインク使用量を減らし、商品が店舗から消えてしまう欠品を防ぐ。

食料品、日用品などでパッケージや梱包を簡素化する取組みが広

がってきた。様々な分野の企業が厳しい状況を乗り切るために装飾や無駄を省く努力を重ねる一方で、印刷現場ではナフサに頼らないパッケージを推進する動きも出ているそうだ。

ナフサの供給不安や価格高騰は、プラスチックや化学製品の原料不足を招き、建設業界にも深刻な影響を与える。価格の上昇だけでなく、建材不足や納期遅延、工事費増加など業界全体に波及する。資材の事前確保や仕入れ先の分散、代替製品の検討を進め、外部環境の変化に対応できる強靱なサプライチェーン（供給網）づくりが求められる。

伝統の技を失う前に

学名「ニッポニア・ニッポン」。「朱鷲（とき）色」と呼ばれる淡いピンク色の美しい羽を広げ、優雅に大空を飛ぶ国の特別天然記念物・トキは、その美しさで多くの人の心を捉え続けている。染色家はトキの羽の色を追求。桜の枝から「鴛（とき）

色」を再現した。陶芸家はトキの羽ばたく姿に魅かれて、レリーフで表現。日本画家は絵の中でトキを自在に飛ばす。まさに日本を象徴する鳥だ。

かつては日本各地に生息していたが、明治時代以降に乱獲や開発で、その数は激減した。一九八一年に野生のトキを保護して繁殖を試みるも失敗。日本のトキは絶滅した。その後中国から贈呈されたペアをもとに人工繁殖の技術を確立し、二〇〇八年に佐渡島で放鳥。自然繁殖にも成功して生息数は約五〇〇羽にまで回復している。

能登半島に位置する石川県羽咋市で五月末に佐渡島のトキが本州で初めて放鳥された。人工ふ化や野生復帰に向け、懸命に努力を続ける関係者の喜びもひとしおであるう。トキが普通の鳥になり、どこにでも居る状況になるのが最終的な成功だという。今回の放鳥は、生息域を全国に広げる大きな一歩だ。

建設の世界には、現代の科学でも

完全な再現が困難な「失われた技術」が数多く存在する。更に職人の高齢化で伝統の技が失われる危機にも直面している。ICTやAIといった先端技術の導入と活用が進んでも、これまで培われてきた職人の技のすべてが代替できるわけではない。

使えなければ技術はいつか廃れる。伝統的な技を現代のエンジニアリングでアップデートし、社会の要請や現行の法規などに適合させる。使うことで技術は磨きがかかり、次世代へと伝わっていく。

民家で初の国宝が誕生

長野県軽井沢町の矢ヶ崎川左岸に茂る木立の中に、美しい形態と豊かな空間を備えた別荘がある。RC造の一階に、大きく張り出した木造の二階と中三階を載せた建物は、片流れの屋根を架け自然に溶け込む。モダニズム建築をけん引しながら住宅も多く手掛けた建築家の吉

村順三氏（一九〇八～一九九七年）が、一九六二年に建てた自らの別荘。スギ現しの内外装や半屋外の空間などの手法を用い、居室などがテラスや吹き抜けでつながる豊かな空間を創出した木造モダニズムの秀作だ。

旧吉村順三別邸が国の重要文化財（重文）に指定される。文化審議会（文化審）が先日、文部科学大臣に答申した。戦後に竣工した住宅の重文指定は、建築家の菊竹清訓氏（一九二八～二〇一一年）の自邸「スカイハウス」（一九五八年竣工）に続いて二棟目となる。

旧吉村順三別邸、スカイハウスともに「ピロティ」によって住居全体を持ち上げている。ピロティは、モダニズム建築の巨匠ル・コルビュジエ（一八八七～一九六五年）が一九二六年に提唱した「近代建築の五原則」の一つ。戦後一〇年以上が経ってピロティが社会に受容され、美術館や庁舎といった公共建築にとどまらず、住宅建築にも広がった。そ

んな時代背景にも注目したい。

文化審は現存最古級の民家二棟を国宝に指定することも答申した。兵庫県内にある「箱木家住宅」主屋（神戸市北区）と「旧古井家住宅」（姫路市）が民家で初の国宝となる。

十四世紀に建てられた箱木家住宅は、国内に現存する最古の民家。中世土豪の住生活の実態を知るうえで類いまれな現存遺構となっている。旧古井家住宅は十五世紀の建築。中世の上層民の生活をひもとくうえで貴重で、中世の景観を伝える民家建築だ。ともに深い文化的意義を持つと高く評価された。

住宅に対する価値や評価が変わりつつある。建築家や住人の思想を通じ、時代とともに変化する住宅のあり方を見続けていきたい。